

現代詩 ● 佳作②

布巾

山口 真喜 作

やまぐち・まさき
7年生まれ。無職。横浜市緑区。

細く開けられた台所の出窓
布巾がぶら下がっている
茹でた青菜をぎゅっと絞ったいんを
微かな匂いで思い出
茹で立ての熱ひは
風に吹かれて乾いた布巾は
卓袱台に置かれたざるの上に、
ふんわりと乗り、
蒸したサツマイモの湯気を
いっぱいに吸い込んでいく

初めは真つ白だった
強張ったさうじには

講評

「布巾」は誰もが毎日使っているなにげない物。作者はそれがちやん物に対して自分と重ね合わせ、やさしい愛情を持つて詩にする。生活の中から生まれた小さな発見だ。これは詩人の目を持っているからに違いない。(審査員・金井 雄二)

第50回
神奈川新聞

文芸コンクール

作品の掲載に当たっては、
原文通りを原則としています。
入選作は順次掲載します。

次回は16日の予定

短編小説 ● 佳作②

ねえちゃんとおふろにはいつてる?

浅野 葛 作
あさの・かつら
浅野北斗 (あとの・ほく)
1983年生まれ。
自営業。横浜市西区。

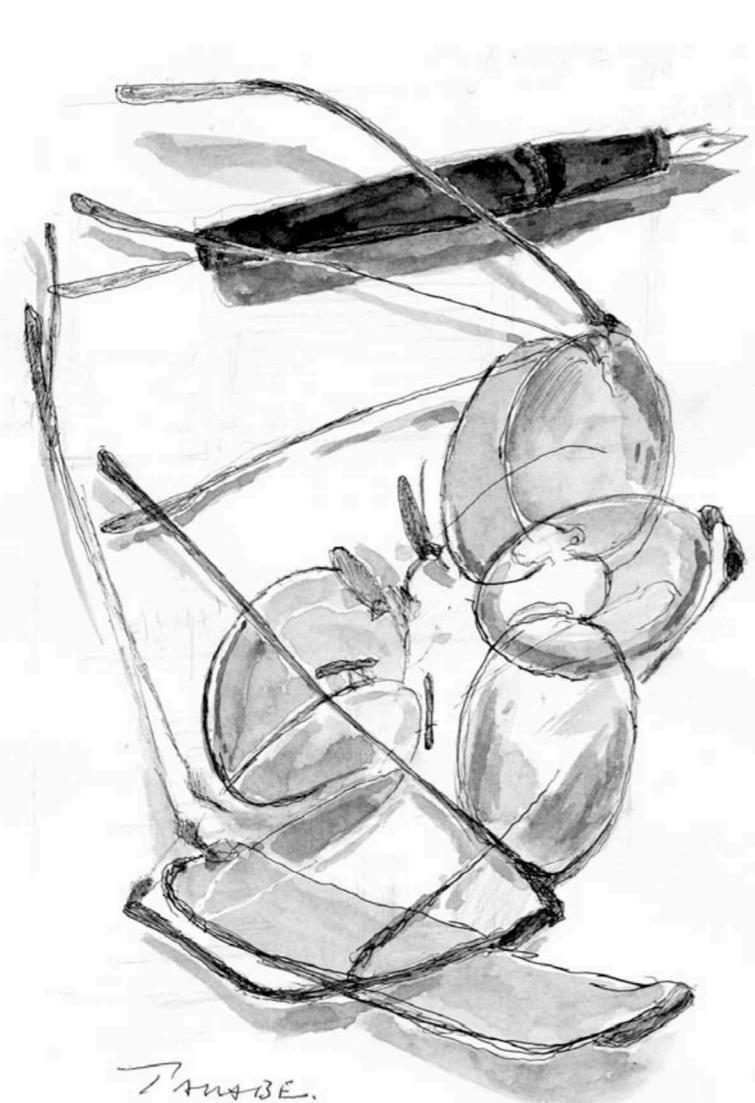
「はじめ子」が出しゃばったことないことにしたしひとりが悪いようなんにきた。もう、やつてはならないだろし。渋沢さんの選択が招いた、とせんの結果なのだ。
そもそもにして、「お姉ちゃんがすき」つてなんのことの常々とした態度。その自信はいたいがかりいるのか。なんのためいもなく言えるのがもう気にいるない。

塾が終わってまっすぐ家に帰った。玄関のドアを開くと、おみそ汁の塩っぽいにおいが混じる湯気に巻かれた。もうおなかペコペコだった。リュックをやん夕までイジつてやった。お弁当の日には「愛姉弁当でしょ?」宿泊訓練が近づけば「お姉ちゃん」とお風呂に入れないから「さみしくて死んでしまう?」などなど。

お姉さんはおむびろに、肩にかけたからし色のトートバッグをまわべって、クラフト地の紙、ざくざくをつけ上げた。そして、そのなかから透明なフィルムのショッピングセンターのなかにあるスーパーを指した。日曜日はボイント2倍なのだ。

「これ、あげる。お近づきのしるしに」

「お姉さんには「シスコン」の称号が与えられた。それからのわたしたちは、ことあるごとに「お姉ちゃんがすき」つて青いあいさがプロック壁をよじのぼるみたいに花つけたして、気がついてみたら運動会も終わっていた。軽校してきてから早2ヵ月。7月も間近だ。なのに、渋沢さんはだからと打ち解けた風はない。



田辺 和郎 画

「じをするのはイヤダメだ!」と叱られた。完全にわらねーし。たしひとりが悪いようなんにきた。もう、やつてはならないだろし。渋沢さんの選択が招いた、とせんの結果なのだ。
宿泊訓練が過ぎて、6月になつて、通学路のわきえで青いあいさがプロック壁をよじのぼるみたいに花つけたして、気がついてみたら運動会も終わっていた。軽校してきてから早2ヵ月。7月も間近だ。なのに、渋沢さんはだからと打ち解けた風はない。

「じをするのはイヤダメだ!」と叱られた。完全にわらねーし。たしひとりが悪いようなんにきた。もう、やつてはならないだろし。渋沢さんの選択が招いた、とせんの結果なのだ。
そもそもにして、「お姉ちゃんがすき」つてなんのことの常々とした態度。その自信はいたいがかりいるのか。なんのためいもなく言えるのがもう気にいるない。

お姉さんはおむびろに、肩にかけたからし色のトートバッグをまわべって、クラフト地の紙、ざくざくをつけ上げた。そして、そのなかから透明なフィルムのショッピングセンターのなかにあるスーパーを指した。日曜日はボイント2倍なのだ。

「これ、あげる。お近づきのしるしに」

お姉さんはおむびろに、肩にかけたからし色のトートバッグをまわべって、クラフト地の紙、ざくざくをつけ上げた。そして、そのなかから透明なフィルムのショッピングセンターのなかにあるスーパーを指した。日曜日はボイント2倍のだ。

「これ、あげる